

生まれることば、身をもって一橋本匠の「ひらがな・仮」

F. アツミ (Art-Phil)

「こう、こう、こうなって」「こうして、こうやって」「こうなってるでしょ」。何かを教える老婆の声は、その声だけを聴くと意味をなさない。「たて、よこ、かいて」「こうなったら、くるりって」とテンポよく語る老婆の声は独特のグルーブを醸し出し、舞台上のさらしのたからだを突き動かす。草書の字の動きを省略して成立した女手（ひらがな）の動きを、演者である聞き手は「どうやって」「うん」と感心しながら書き方を模倣しているという。老婆と演者の問答のなかで、さらしのからだはその文字を身振りとともに演じる。

くるとまわるときはでんぐり返り、点には張り手、手を伸ばして、脚を開いて、「波」「久」「大」などの文字を裸の身振りで模倣する。「み」をめぐる一連のインプロビゼーションからは、大いなるひらがなの威力を感じることができた。「みーんみんみんみんみー」とみんみん蟬になったかと思うと、「あい」「まい」「みー」の英語の一人称の格変化の発音へ、そして「まま」と会場にいた子どもの声を受けて、「ま」が「み」へと接続される様子からは、「み」の現代的な公共性をどこか垣間見ることができたのではないか。

さらに「波」をめぐる一連のパフォーマンスでは、からだのさらしは芸者遊びよろしく解きほどこかれ、舞台の手摺りに結びつけられ、大きく波打つことになる。その間にも、「み」の身振りが挿まれ、みんみん蟬が大波へと変容するからだのユーモラスなダイナミズムが表現される。「Me」において「身」を「見」ること。「み」に触発された身振りの多様なイメージを総合し、現在進行形のプロセスのなかで公共へと向けて表現する橋本 匠のからだは麻紙をはしる書のように鮮やかでどこか愛らしい。

ひらがなをめぐる一大絵巻物をしめ括るのは、老婆と演者との思い出話だ。「何歳？」と老婆が聞き、「2歳と3カ月」と応える演者。演者が生まれてはじめて文字を書いたときのことを回想しているのかもしれない。その文字は「参考図版」としてあらかじめ観衆に渡された「の」のような、「め」のような、「み」のような、ひらがなになる前の描かれた身振り、あるいは画のようなものであつたらう。最後に演者が会場を一周してからステージの中心に立ち、自身の名である「匠」を思わせる文字を表現したのも印象的な一場面であつた。

本作で登場する老婆は、演者の祖母で書家であつたという。11世紀にひらがなで書かれた「高野切古今集」（伝 紀貫之）に端を発し、演者の極私的な回想とひらがなをめぐる大文字の歴史がステージ上で即興的に交差するとき、生まれたてのことばは文字の身振りへと受肉するだろう。個人の記憶を歴史の記録へと転写するエクリチュール（かくこと）の戯れがそこにはある。「トランスフォーメーション」を独自に構築する橋本 匠による、心あたたまる、美しくもみずみずしい身振りの習作。